



故郷・松本で創作に打ち込む 漫画家きゃめろん

巻頭 特集

松本第一高校出身の元パレルメーカー社員が、Twitterの投稿をきっかけに漫画家デビューを果たしました。自らの死生観を作品の設定に投影したもので、大きな反響を呼んでたちまち単行本化。今回は漫画家として歩み始めた「きゃめろん」さんにスポットを当てます。

SNSにマンガを投稿 大反響で連載スタート

きっかけはコロナ禍でした。大手パレルメーカー社員として勤務していた昨年。緊急事態宣言に伴い、当時配属されていた宮崎県内の店舗が休業となりました。それをきっかけに「完全オリジナルの作品でどれだけ見てもらえるかを試してみようと思いました」と、Twitterに12ページのマンガを投稿しました。

すると、「いいね」が2万件以上もつく大反響。ここから大きく人生が動きます。投稿して1週間以内にすかさず出版社から連絡が舞い込み、10月からウェブで連載がスタート。そしてデビュー作「寿命ですよ、お客さま」の単行本がこのほど、発行されました。

当初は仕事と両立していました。二足のわらじを履く生活は多忙をさわめました。正午から午後9時まで店頭に立って勤務し、帰宅して

朝方4〜5時までマンガを描くサイクル。睡眠時間は削られ、「屍のようでした。今考えると恐ろしいなと思います」と苦笑いしながら振り返ります。そしてパレルの本業で店長になる打診を受け、「なったらマンガを描けない。それなら好きで夢だったことをやりたいと思いました」と、漫画家に一本化することを決意。7月に退社して松本市内の実家に戻り、現在はそこを創作の拠点としています。

自身がいただく死生観 デビュー作の設定に反映

以前のような趣味ではなく、仕事としてマンガと向き合う日々。「気楽には描けなくなりました。市場に出る以上は高みを目指さないとけないし、コマ割りや技術、ストーリーも含めて全部が課題です」と自己分析しています。コロナ禍で「人が亡くなるニュー

スしか流れてこなかった」という日々の創作活動から生まれた作品。天寿を全うした人を「彼の地」へと送るサービス業に従事する。天の使い“たちと、特殊な事情で魂だけが宙ぶらりんとした少年を軸に展開されるストーリーです。デジタル機器を駆使して「走馬灯」を編集するなど軽快なコメディ要素も散りばめられています。中心に据えたテーマは生命と死生観。この世界で寿命を迎えた人は魂となり、「最後の審判」が下されるまで待機することになっています。

本人は「突然思い付いた設定」だ

創作物あふれる世の中で 誰かの心に爪痕残す

トルコ人の父と日本人の母との間

といいますが、根底には自身の死生観も深く関わっているようです。「死は終わりでもあるけど始まりでもあるし、いずれ誰にでも訪れるもの。必要以上にマイナスに捉えなくてもいいと思うんです。死んだとき後悔しても遅いので、だからこそ今を大切に、悔いのない人生を送ってもらえれば」というメッセージを織り込みました。

に生まれ、松本市で育ちました。幼少時から絵を描くことや小説を読むこと、ストーリーを考えることが好きだったといえます。松本第一高美術芸コースでは漫画研究同志会に所属。その後は武蔵野美術大に進み、一人暮らしを始めたと同時にマンガを読みあさるようになりました。大学時代はデザインや美術に関わる仕事を志す傍ら、2次創作の同人誌制作にも打ち込んでいたといえます。卒業制作で初めて完全オリジナルの漫画に挑戦し、短編3本と130ページの論文を制作。構想も含めて費やした4カ月ほどの期間は「死

ぬかと思った」というほど過酷で、これを機にマンガを描くのは趣味の範囲に留めようと決めた——はずでした。それでも、コロナ禍での投稿をきっかけに専門の道を選びました。「心のどこかで捨てきれないものがあつたんだと思います。選んでよかったし、以前はいろんなことに興味がありました。漫画家になった今は『これ以外にない』という感じ。本棚の肥やしになるのではなく、持っていたいと思われる作品を作りたいです。今は似たストーリーの作品があふれていますが、その中でも

誰かの心に爪痕を残せるものを描きたいです。そうした思いを抱きながら日々、創作活動に打ち込んでいます。

